2011年
アラスカ遠征報告書

信州大学山岳会
信州大学学士山岳会

目次：

はじめに・・2
カヒルトナ氷河周辺の登攀・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
デナリ・・・14
カヒルトナピーク縦走・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29

日程：

《カヒルトナ氷河周辺の登攀》・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・記：大木信介

4月25日～5月13日

メンバー：大木信介（OB）・谷口けい（部外者）

①5月2日　**フランシス** 10,450 feet（3,185m）南西稜～東稜下降

②5月5日　**Mini-Moon** 登攀敗退記

③5月7日　**カヒルトナクイーン** 12,380 feet（3,773m ）西壁登攀

《デナリ》・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・記：土田孝浩・小平貴則

5月14日～5月29日

メンバー：花谷泰広（OB）・大木信介（OB）・土田孝浩(会3)・小平貴則(会3)

　　　　：谷口けい（部外者）・宮西広太郎（部外者）

《カヒルトナピークス縦走》・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・記：花谷泰広

6月9日～6月17日

メンバー：花谷泰広（OB）・谷口けい（部外者）

タルキートナよりデナリ

はじめに

記：大木信介

3 月 11 日の東日本大震災は被災者のみならず、日本中に大きな悲しみをもたらし、誰もが心を痛めていると思います。日本が大混乱の中、一年以上前から温めていた計画がアラスカ・デナリ（マッキンリー）6,193m 周辺での長期登山です。カヒルトナ氷河周辺の登攀、デナリ・ウェストバットレス（ノーマルルート)、デナリ南壁などなど、カフェ・コン・レチェ隊の谷口けい・花谷泰広・大木信介を中心に計画が進められていました。

3 年前にデナリ南壁カシンリッジをカヒルトナピークスからつなげ、素晴らしいルートを登ったまま還らなかった二人の友人、山田達郎君と井上祐人君。二人の家族や関係者と一緒にデナリをウェストバットレスから登る、彼らの新ルートの再登など、計画は多岐にわたり、参加者も 12 名以上で大いに盛り上がっているところに東日本大震災が発生しました。

震災後「この混乱時に遠征に行くべきかどうか？」誰もが考えざるを得ず、メンバー全員に「今本当にやるべきこと」を考え直す時間を設け、話し合いも行いました。谷口・花谷も悩み、震災直後のボランティア活動に参加、その経験を経て「こんな時こそ萎縮するのではなく、自分のやりたいことを続けるべき。自分たちの活動を通して少しでも日本に元気を届けたい」、そんな想いを胸に我々は心新たにアラスカに向かうことにしました。ボランティア活動に参加できなかった私は、デナリに集まる世界中のクライマー達から被災地へのメッセージを集め、山頂から日本に届けたい、どんな小さな事でもいい、何かしたいと願い「日の丸」を持参しました。

最終的な参加メンバーはカフェ・コン・レチェ隊 3 人と信州大学山岳会の現役学生 2 人 (3 年土田孝浩・小平貴則)、他 1 名（宮西広太郎 First-Assent 所属）の計 6 名となりました。山田・井上のご家族が参加できなかったのは残念でしたが、遠征を取りやめて被災地のボランティア活動に出掛けた人など、それぞれが思い悩んで下した結論です。

また現代の大学山岳部の抱える大きな問題として現役の育成があり、信大にとっても最大の課題です。2009 年に当時 2 年生だった江川信を 60 周年記念事業のペリヒマール遠征に参加させたことに続き、今回も現役二人が参加、一人が登頂し、長い登山活動を通して二人とも大きく成長しました。土田・小平の両君は OB 会による現役支援を始めた年の新人であり、その二人と海外の山に遠征できたことを嬉しく思います。自分が初めての海外遠征として花谷さんと共にデナリに登ったのも彼らと同じ 3 年時だったと思うとなお感慨深く、今後の活躍を見守りたいと思います。

無事に登山活動を終えて報告書を届けられることを喜びに思います。この遠征にあたり、OB の皆様より多大なご支援を、そして「信州大学学士山岳会小川勝山岳基金」を適用して頂き、若い OB2 人と現役 2 名、資金面でも大いに助けられました。登り続ける SAC 隊員に対する変わらぬ OB 会の愛とバックアップには感謝し尽くせません。また㈱モンベル様よりテントやウェア、ジェットボイル一式等、装備面で多大なご支援を頂きました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

《カヒルトナ氷河登攀記》

記：大木信介

4 月 25 日、一足先に出発した谷口・大木はアンカレッジにて買い出しを済ませ、27 日早々にカヒルトナ氷河に入山した。5 月 14 日に 4 人と合流するまで BC 周辺の山々を登攀する予定だ。シーズン前にも拘わらず、既に多くの登山隊がキャンプを張っている。

今年のアラスカは数年振りの厳しい冷え込みが続き、ハンター北壁の氷壁は防弾ガラスのような硬さ、取り付けるようになるにはもう少し待つより他ないので、我々は BC の目の前の山、日当たり良好なフランシス(Mt.Frances 3,185m)の南西稜を最初に登ることにした。岩、氷、雪壁ありの総合的なアルパインルートだ。

入山翌日 28 日、快適な BC 作りに半日かけ、午後は南西稜の取り付きを確認した。29 日、氷河の歩行を確認しつつ、東稜下降後のアイスフォール帯を確認した。夕方、同日に入山していたカナダ在住の栗原次郎さんと北海道在住のクライマー白石淳也さんとお茶をした。栗原さんに会うのはヨーロッパ以来で実に 10 年振りの再会だった。日の丸に早速被災地へのメッセージを書き込んでもらった。フランシスの準備を終え、大きな寝袋に潜り込む。まだ白夜には早く薄暗い夜を楽しむことが出来たが、その分かなり冷え込む。朝は太陽がテントに温もりを届けるまで動ける気がしない。

30 日、夜中からの雪で目が覚める。アラスカの BC 生活で忘れてはならないのがスコップをテント前室内に入れておくこと。うっかり寝すぎたり、雪が降りしきる中で怠けて粘りすぎると全てが埋まってしまうのだ。降ったり止んだりを繰り返し、幸い雪かきには追われなかったがこの日は沈殿した。

5 月 1 日、フランシスの雪が落ち着くのを待つため、アイスルートに出掛けた。ハンターからカヒルトナクイーン(Kahiltna Queen)に続く支稜線には多くのミックスラインがあり、稜線まで抜けることが出来る。Mini-Moon、Mini-Mini-Moon などが代表的なルートだ。我々はハンター北壁の偵察を兼ね、Mini-Moon に出掛けた。

世界一美しいと言われるアラスカの氷河を歩きながら大きなハンター北壁を眺める。学生時に花谷さんと二人で来たのが 12 年前、20 歳当時の小僧は周りの風景を断片的にしか覚えていないが、一回り年を重ねて見る今の風景は一生忘れないんだろうと思う。

Mini-Moon に取り付くが、最初の 1P、シュルントの乗越にけいちゃんが手こずり、そのまま敗退した。フランシスに気持ちが向いている今、自分の嗜好とは違うルートに気持ちが向いていない。晴れ間からカヒルトナクイーンや周りの山を眺め、この先の登攀をぼんやりと考える。Mix クライミングよりダイナミックな登山らしい登山がしたい、フランシスはそれにうってつけのルートといえる。

デナリ BC の様子　目の前にハンター北壁が聳える　見事な山だ！

＝＝＝＝《フランシス（3,185m）南西稜～東稜下降》＝＝＝＝

5 月 2 日 8:00 BC 出発。フランシス南西稜は 4 つの岩塔を超えると BC からもよく見える巨大セラックの偽ピーク（False Summit）に達し、山頂はそこから長い稜線を辿ったずっと奥にある。連日の積雪で雪は多いものの、乾いた雪が岩に乗っているだけで非常に登りにくい。

8:45、ほぼ末端より取り付いてコンテで岩稜に沿って登り始める。第 1 岩塔までは尾根上の岩を捲きながら進み、高度を稼ぐ。カヒルトナ氷河にはデナリに向かう一本の美しいトレース、数名の登山者が所々に見える。

第 1 岩塔、けいちゃんトップで登攀開始。左側のコーナーから取り付くがいやらしいドライスノーで非常に登りにくい。右のフェイスに抜けて快適なテラスで切る。ここから第 2 岩頭、直登せず左から回り込み尾根上に抜けるが雪が悪く、戻って尾根左下をトラバースし、第 3 岩塔の取り付きに。下部岩壁の左側のハンドクラックを抜け、雪壁を左にトラバースし、5m クライムダウンして左の岩稜に大きく抜ける。ルート図にはここから右上のガリーを詰めて南西稜に戻るとあったがドライスノーが悪く、そのまま左上気味にコンテで登っていく。クライミングはいつだって時間との勝負だが、中間支点は必ず取るようにした。友人のルートを再登しに来て始まる前に終わるわけはいかない。

コル（Notch）の下で傾斜が増したので再びリードで抜ける。振り返るとジャンダルムがあり、雪の悪さが際立っているので、いいラインで抜けられたようだ。コルより 2P で第 4 岩塔基部に到着。ここがル

ートの核心部で 5.8 のワイドクラックの登攀になる。足がはまる程度の丁度いいクラックにアイゼンを刺しながら登る。第 4 岩塔の上部もチョックストーンを超える高度感のある快適なクライミングでまさにこのルートのハイライトだった。

第 4 岩塔の先はひたすらコンテで進む。手持ちのギアが無くなったらトップを交代した。20 時を既に回っており、太陽は Mt.フォーレイカーと Mt.クロッスンの稜線に沈もうとしている。明日は大荒れという予報もどうやら外れそうで朝から無風快晴の最高の天気だ。暖かかっただけに雪の状態は最悪になってきた。表面はサラサラだが中は湿っていて重く靴にまとわりつく。2, 3 歩毎にアックスで雪を落とさないと命取りになる雪だ。

フランシス南西稜中間部

偽ピークが見えるものの、なかなか近づかない。スノーバーを 2 本しか用意しなかったのも痛い。「スピード＝安全」で支点を取らずに進む隊も多いだろうけど、我々は必ず中間支点を取り慎重に進んだ。偽ピークの下部右側をトラバースして回り込むとき、ちょうどハンターの夕焼けと重なった。ハンターはピンクから深紅へと変わり、最後に薄紫色にほんのり染まり、その彩りも空へと吸収された。そのドラマに見惚れながら偽ピークからフランシスへの頂上稜線に入り、コンテで進み続ける。正面のデナリはまだ残照に輝き、その大きさが際立っていた。

僕は内心焦っていた。この時間には BC に戻っているつもりだった。自分たちの登攀スピードが遅かったのだろうか。「夜になっちゃうねー。ちょっとヤバいねー」「まー、待ってれば朝になるし、疲れないように行こう」と諭されて気持ちが落ち着いた。ゆっくり進む。夜が遅く、朝は早いのが白夜、疲れない気配りとペース配分も大事だなーとアラスカのクライミングをけいちゃんから学んだ。

頂上との中間に二つのジャンダルムが残されている。ルート図では簡単に抜けられるような記述だったが雪質が悪く、ガリーを登ったり降りたりしてようやく抜けた。いよいよ冷え込んできたので防寒着を全て着用し、左の巨大雪庇に注意しながらコンテで進み、25：30、待望の山頂に立った。太陽はとっくに沈んだはずだが天はまだうっすらと白みを帯びている。その僅かな白みが太陽を引っ張って沈みきらないように頑張っているようだった。粘り勝ちして太陽を引き上げた時が朝、アラスカの白夜は近い。

下りは支点を作り、60mずつスタカットで下降することにした。あくまでも慎重に行動する。出だしからセラックらしい崖に阻まれ、ルートが取れない。暗いので確信は持てないが、雪を転がしてみると、急に速度が速くなり、フッと見えなくなる。うっかり様子を見に行くと落ちてしまいそうだ。右往左往したが稜線を少し戻り、大きく捲いて東稜への入口を見つける事が出来た。

偽ピーク直下のトラバース中の谷口　ハンターが夕陽に染まり見事

快調にピッチを重ねたが、再びセラックらしき崖に行く手を断たれた。暗くて見えないので確認は出来ないが雪の転がり方がやはりおかしい。間違いなくセラックだ。左右を確認したが巨大なセラックのようで下降路を見いだせない。懸垂下降も検討したが先が見えない上に暗くては迂闊に降りられない。明るくなり始めているので少し待とうと提案したが余りの寒さに却下、大きく捲いて岩稜の頭が見えたのでそこを目指してクライムダウン。セラックの下に抜ける事が出来たが今度は大きなクレバス、左から捲いた。周りは明るくなり始めている。カヒルトナピークスの偵察も兼ねていたが、一刻も早く下降したい。左下のクレバスまで下からのトレースを発見した。このセラックとクレバス帯を見て引き返したと思われる。トレースを目指してトラバース気味に下降する。

「クレバスいっぱいあるから気をつけてねー」「はいよー、了解」と確認しあった3秒後だった。ヒドンクレバスに落ちた。まさに落とし穴、雪面の抵抗が突如無くなり、魂を地上に残したまま体だけが落下したようだった。落ちながらに理解し、死んでたまるかと思う。ロープの抵抗を感じ、狭いクレバスだったので横向きのツララを次々と砕きながら落下速度が緩み、ロープのおかげで足元の横に伸びた氷柱で止まった。

辺りは濃厚なブルー、上の狭い落としロから僅かに明るくなってきた空が見えている。映画で見たワンシーンに良く似ている。足元は暗く、深さが測れない。中が広がっている空洞タイプのクレバスでなくて良かった。足元の氷柱も崩れたのでバック＆フットで体を固定、声は届かない。幸いアックスもアイゼンも残っているので登り始める。ロープも引かれ、声は届かないけどロープ越しに意思が伝わったと安心した。落ちたのは5m弱、狭いクレバスだったおかげで自力で上がる事ができた。

ヒドンクレパスに落ちるなんて初めてで面喰った。慎重を期してアンザイレンしていなかったら死んでいたかもしれない。けいちゃんの見事なボディービレイで止まった。感謝、そして引きずり込まなくて良かった。落ち着いたもののクレバスを飛び越えるのが怖かった。けいちゃんもこの手のジャンプが一番苦手で怖がっていた。セラック、クレバス、ヒドンクレバス・・・、下りの核心だった。

トレースに入り、安全なところまでスタカットで順番に下降する。コルの手前のルンゼにトレースは続き、AM8：00、ようやく氷河に降り立ち、先日の偵察地点に合流できた。BC に 9：30 到着、出発から25時間半が過ぎていた。

雪の状態が悪かったとはいえ、時間がかかりすぎた。情けないと恥入るような気持ちだったが、あとでレンジャーに聞いたら数日前に登ったガイド同士も20時間以上かかっていたそうで、それなら上出来かと安心した。何よりも、怪我がなくてよかった。

後日、Mini-Moonを登りに行った際、下降路の東稜を遠目に見ることが出来た。山頂直下と中間点のセラックを肉眼でも確認でき、正しいルートで下降出来たことにホッとした。BCからはデナリ、ハンター、フォーレイカーのアラスカ三山がよく見える。いつもこの山々を眺めているが自分たちの足跡を残した今、もう一つ、これからはフランシスを特別な気持ちで眺めることが出来る。標高はデナリの半分、なかなか陽の目を見ない山とはいえ、大きい。訪れる人は少ないが素晴らしい登攀に大満足だ。長い遠征の第一弾、大きな一歩だった。

《装備》ロープ60m×1本、ロックス×1セット＋α、カム×3、トライカム×1セット、スノーバー×2、アイススクリュー×2、アルパインドロー×10

BC上部よりフランシス　左は偽ピーク、右が山頂

5月3日、4日とレスト。装備のさらなる軽量化、改善に勤しむ。次はアイスクライミングの練習を兼ねて先日登れずに敗退したMini-Moon。

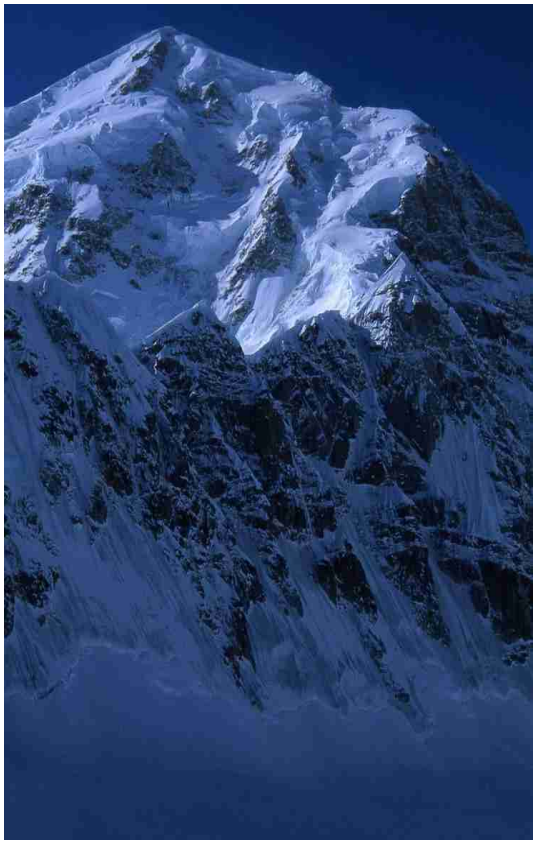
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝《Mini-Moon登攀敗退記》＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

5月5日、Mini-Moonに取り付いた。目的は苦手なアイスクライミングの練習。前回はシュルントの乗り越しで諦めて戻った。前日に登ったスコットランド隊のトレースが右にあるのでこれを辿らせてもらう。シュルントを超え、傾斜が落ちたところでけいちゃんがピッチを切る。上は垂壁になっている。登り続けるか思い悩んでいる。10分程話し合う。反対側には12,200feetのピークがお日様を受け、この北側とは対極的に暖かそうだ。けいちゃんはそのキャリアからは信じられないくらい極端に寒さに弱く、気持ちがイマイチ乗っていない。自分はというと、自分のクライミングを追及するほど登り込んでいるわけでもなく、このアイスルートに対して特に情熱も湧かない。このルートは自分たちに合ってないのではと根本的なことを見直す。

とりあえず、アイスにも慣れる必要があるのでもう1P登る事にして垂壁部分を超え、50mほどで切る。垂壁部分は短く乗り越えてしまえば上が見渡せ、後は機械的に登るだけ。ふくらはぎが悲鳴を上げるクライミングが当分続きそうだ。長い長い氷のライン、問題なく登れそうなのでそのまま上を目指すことにした。

傾斜の無いアイスクライミングは腕は楽だがとにかくふくらはぎがきつい。両側の岩壁が狭まりだし、6P 目に突入。氷はブルーアイスよりスナイス(Snice＝Snow＋Iceの造語。一番登りやすい雪質)になり、ようやくアラスカらしいルートコンディションになった。スナイスはサクッと刺さり快適だ。7P 目でガリーに入ってゆく。上からは間を置かず、スノーシャワーが降り注いでいる。

核心部の岩のピッチ下に付く。アイスと岩のピッチのはずだが、前日のスコットランド隊が岩の氷とスナイスを全て落としたようで壁側が全く使えない。残されたのはワイドクラックはハングしていて悪い。粘ったもののあと一歩のリスクが負えず、敗退することにした。本番前の怪我、それが頭をよぎった。



ハンター北壁より派生する支稜には数々のラインがある

5Pの懸垂でシュルント下に戻る。20：00、BCに到着。スコットランド隊に核心部の様子を聞くと、壁に雪が付いていたけどアックスを刺しても切ってしまう難しい雪だったという。雪があっても登れなかったかもしれない。

敗退はしたものの目的のアイスクライミングは出来たし、快適だった。しかし、この手のクライミングは自分の嗜好に合わないと痛感した。やはり、山登りらしい登山がしたい。帰り道、周りの山を眺める。12,200feetのピーク、この氷河のどん詰まりの鋭鋒カヒルトナクイーン。。仲間たちと合流するまでどのような登山が自分たちらしいか、どのような泥臭いラインを引けるか、垂壁の登攀よりも泥臭い縦走系の登山を模索するいいきっかけになったと思う。しばらく考えて楽しもう。

5月6日、レスト。7日、カヒルトナクイーン偵察に出掛ける。自分たちの能力と好みを話し合った結果、けいちゃんが面白いルートを考案した。カヒルトナクイーンから 12,200 feet ピークに縦走する計画だ。このルートはまだ未踏であり、過去に反対側から縦走しようとした隊は稜線の雪が悪く、敗退している。12,200 feet ピークからフランシスの下降路で使った東稜のコルまで下りることが出来ればこの一帯の半分を縦走したことになる。

カヒルトナクイーン西壁の麓まで登り、シュルントを超えられることを確認して偵察終了。西壁で一般的に登られるルンゼは面白くなさそうなので、ダイレクトに頂上に突き上げる岩稜のラインを取ることにした。下から見上げたところ、最後はガリーを登り詰めて何とかなりそうだ。

BC に戻り準備を進める。計画の面白さに胸が躍る。ハンター北壁には実力不足であり、取り付ける自信がなかった。このルートはまさに自分たちらしいルートであり、実に面白い。カヒルトナクイーンは見事な鋭鋒で魅力的な山、楽しみだ。

Mini-Moon 核心部直下　スナイスにアックスがキマる!!

＝＝＝＝＝＝《Kahiltna Queen 西壁登攀記》＝＝＝＝＝＝＝

5 月 9 日 7：30、BC 出発。稜線付近に雲が纏わりついている。縦走を思うと視界は絶対条件、翌日は強風と悪天の予報ではあるが今日までの発表された嵐の予報は 2 度とも外れていた。荒天に転じそうになかったので出発した。

カヒルトナクイーンはBCがある氷河(Kahiltna Glacier Southeast Fork)の源頭の山であり、Tokositna Glacier、Ruth Glacier West Forkの三つの大氷河の源頭でもある。絶好の展望を期待している。

10：30、シュルントに取り付く。今日は湿気が高く、取り付きまでの長いアプローチでの汗が冷えて寒く感じる。コンテで登り始めるが、シュルントがいきなり崩れる。広いルンゼを詰め、吸い寄せられるように岩峰の中に入ってゆく。北側斜面の雪はサラサラで不安定、とたんに悪くなる。狭いリッジに出るが上の岩峰が超えられず、右に懸垂して南側の雪面に戻る。正面の岩稜は見た目よりかなり悪いことが予想されたので岩稜南側の斜面をトラバースしてから雪壁を登って高度を稼ぐ。登るにつれ偵察時に検討したルートよりも右側の氷の詰まったガリーが美しく自然なラインに見えたのでそこを目指す。時々上から雪崩が落ちてくるが岩との際を登って直撃を避ける。

西壁上部ルンゼの入口

15：50、核心部の上部ガリーの登攀開始。素晴らしいルンゼだ。けいちゃんトップで 1P 目、ルンゼ入口の岩を乗り越えて中に入っていく。3P 目よりルンゼは狭くなる。4P 目が最も狭まり、傾斜の強いアイスクライミングとなる。抜けて 5P、6P 目は広くなり右の側壁を使って支点を取る。夕陽を浴びてのクライミングとなり、既にかなりの時間を費やしてしまった。6P 目終了点、太陽が沈みそうで急激に冷え込み始める。7P 目、ルンゼから出て右の岩壁を超えて稜線を目指すことにした。ミックスクライミングから雪壁につなげる核心ピッチとなった。稜線のセラックの下 22：10 到着、日も沈む。全ての防寒着とヘッドライトを身につける。振り返るとハンターが僅かな残光に浮かび上がっている。北峰、中峰、南峰

のハンター三山、これが見たかった。

山頂まであとどれほどか、どうせまだまだ遠いと腹をくくる。セラック下の雪も悪く、いつごっそりと滑り落ちないか気持ちが悪い。ビクビクしながら 60m のトラバースで稜線に出たものの Tokositna Glacier 側はガチガチのアイスバーンとなっている。100m 程コンテで進み、切り立った雪壁から再びスタカットに。余りの寒さと時間切れで縦走への意欲は既にへし折られている。同ルート下降の気配が濃厚な中、軽量化のためにロープは 1 本、ルンゼ 6P 目で側壁に体を預けながら登っている際にアバラコフ用の 22cm のスクリューを落としてしまう痛恨のミスに気持ちが凹む。暗く寒い中、山頂までの距離も掴めない。とりあえず先に見えているコルまで行こうとなり、ロープを伸ばす。コルまで行けば先が見えるはずだ。

60m と 20m でコルに達した。コルは稜線上の巨大なセラックの間で、デナリ南壁が正面に見える。計画した下降路は左のセラックから続いていると思われるが確認できない。右のセラックがカヒルトナクイーンの頂上と思われたが、盛大に崩れそうなのでコルをもって山頂とした。AM2：20 の到着だった。

下り始めるにも薄暗く、寒すぎて体が動かない。セラック下のクレバス内で朝を待つことにした。ツェルトを被り、ジェットボイルでお湯を沸かす。被っているだけのツェルトだが火が灯ると暖かく、ようやく人心地がついた。約 3 時間、うつらうつらしながら時々お湯を沸かして乾燥しきった体を潤した。空が少しずつ明るくなり、5：30 にクレバスから這い出る。東の空はまさに日の出、ハンターも朝焼けに染まっていた。

カヒルトナクイーン山頂よりハンターの朝焼け

下降開始。ひどく寒い。ダウンも着こんでいるのに体の震えが止まらない。手足の感覚はなく、手袋も凍りついている。それでもハンターの朝焼けの写真を撮り続けた。この瞬間の為に来たのだ。下り始めると同時に北風が強くなり、体温を奪ってゆく。ブリザードと吐息で眼鏡も凍りつき、視界もままならない。慣れないクライムダウンは恐く、登りよりも時間がかかる。4P でセラック下に到着、30m さらにクライムダウンし、氷が出てきたので懸垂開始。16cm のスクリューでアバラコフを作る。30m の懸垂

は短く、なかなか進まない。日は昇ったが西壁に当たるまでまだまだ時間がかかりそうだ。

8P ほど懸垂し、ようやくお日様の下へ。が、風と空腹のためか震えが止まらない。ルンゼの入口に戻り、ここからは眠気と闘いながらコンテでシュルントの渡り口を目指してひたすら下降してゆく。20m の懸垂で岩場を下り、ようやく取り付きに戻ったのが 18：15、山頂から 12 時間もかかったことに驚いた。

カヒルトナクイーンからの下降。フォーレイカーが朝日に染まる

風の作用でトレースが全て無くなり、きれいなシュカブラが発達している。軽量化でスノーシューも置いてきている。再びラッセルとなりとどめを刺されることになったが、この美しい鋭鋒を登れた満足感で BC までの長い道のりもさほど気にならなかった。

片付け終わり、スパゲティーの夕食。煮汁から作るスープが格別に美味い。脱水した体の隅々に滲みわたる。翌日、指先数か所が白くなり、ジンジンする。軽い凍傷だ。カシンリッジまで治るか不安になりけいちゃんに聞くと「一週間くらいで治るでしょー」と歯牙にもかけない。爪先が紫色になっているけいちゃんの足を見せられ、黙る他なかった。

＝＝

5 月 11、12 日レスト。5 月 13 日、翌日のデナリ隊との合流を控え、最後の登攀に出掛けた。カヒルトナクイーンから縦走してつなげようとした 12,200 feet ピークを日当たりのいい南壁から登りやすいラインでの登頂を狙った。しかし、適当なラインを見つけ、取り付きまで来たものの、上からの落石が多い。小さいものばかりだが次々に転がってくる。1 週間ほど前から急激に日中の温度が上がってきた。BC でもその変化は顕著で、周りに積み上げたブロックもほとんどが融けて隙間だらけになっている。上部には巨大な懸垂氷河があり、この陽気は恐い。明日から始まるデナリ登山を思い、この登攀は中止に

した。

BCにも戻ってからカヒルトナ氷河の下流に散歩に出掛けた。ハンターをグルッと回り込んでみた。久々に違う風景に出合い、陽気も素晴らしくのんびりと過ごせた。けいちゃんとの17日間のカヒルトナ氷河周辺の登攀もこの散歩で終わる。けいちゃんの発想ならではの面白い登攀ができ、けいちゃんのおかげで食事も大充実、ほんとに幸せだった。まだまだこの遠征は始まったばかり、明日から 4 人が加わり、賑やかになる。最後のひと時、のんびりと物思いにふけるとしよう。

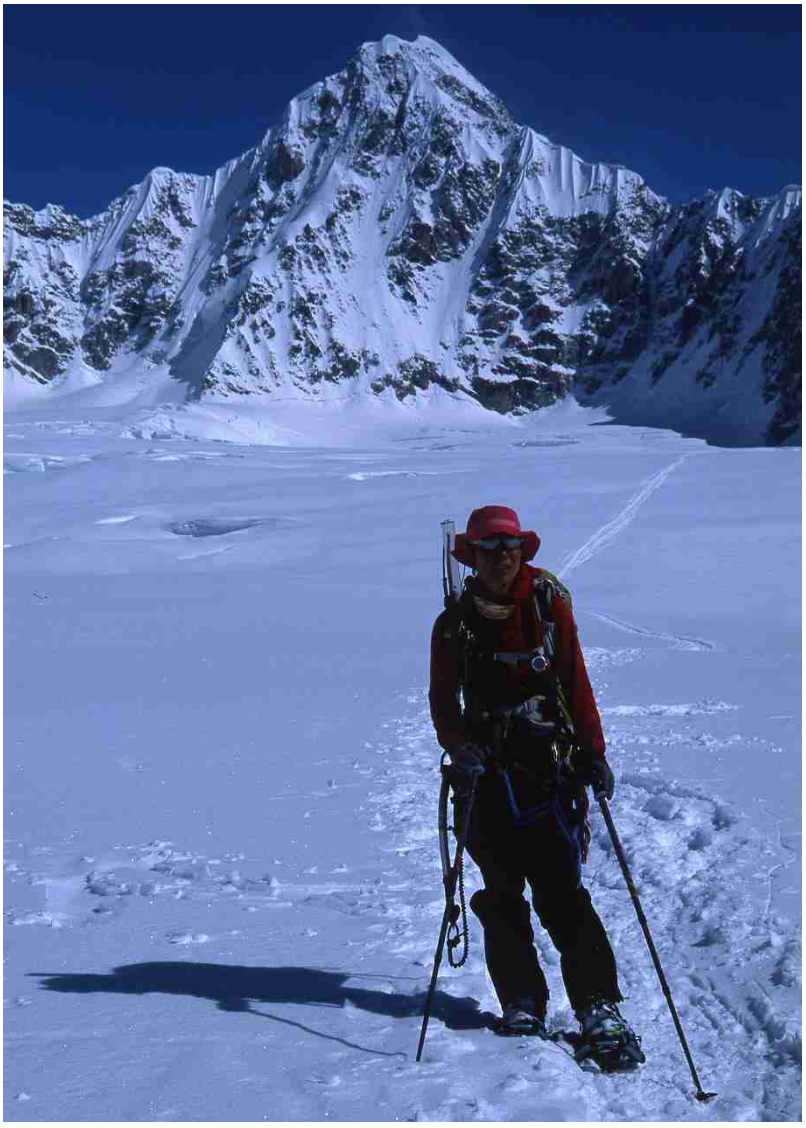
『誇闘夢現－Climb Denali for Japan－』

登攀の合間に多くのクライマーやレンジャーたちと交流し、被災地へのメッセージは着々と集まっていった。誰もが関心高く、メッセージは温かいものばかり。最初に書き込んでくれた栗原次郎さん白石淳也さん。悲しいことに二人はデナリ登頂後、フランシスの新ルートを登っている最中に雪崩に遭い、還らぬ人となった。デナリ登山中のMC（メディカルキャンプ）で訃報を聞き、ただただ驚き、悲しんだ。BC でお茶をした時の取り留めのない笑い話が二人との大切な思い出になろうとは。栗原さんの『Climb Denali for Japan』、白石さんの『誇闘夢現』、二人が日の丸に残したメッセージ。3年前に亡くなった親友、その家族達、登り続ける仲間たち、色々な思いが込み上げてくる。帰国後に二人の遺族の方々にもお会いし、BCでの様子をお伝え出来た。二人は最高に楽しんでいた

登る意味なんて考えた事もないし、気持ちはいつだって次の山だ。みんなそうだと思うし、いつだってそうありたい。最高に楽しんでいたい。

12 年振りのアラスカは新鮮だった。オッサンになり、視野が広まり、山やルートが見える。次はあの山、この山、思いは尽きない。でも根っこは 12 年前に初めて海外の山を登りに飛び出した時のままだ。

このままジジイになりたいもんだ。



カヒルトクイーンとけいちゃん
美しいピラミダルな鋭鋒だ

《デナリ》

遠征の準備から現場で沢山お世話になった花谷さん、けいさん、大木さん（以下愛称でボンドさん)。小川基金から援助して下さり、この遠征に様々な形で手助けをして下さった学士山岳会の方々。自分たち２人がいなくなり、山岳会の運営をしてくれた現役の皆。そして遠征に行くことを許してくれ、後押ししてくれた家族や親せきの皆さま。無事デナリに行って来れたのも、多くの方のおかげです。心からありがとうございました。

隊名：・信州大学山岳会 THE　MEN`S　　・カフェコンレチェ隊
目標の山：アメリカ合衆国アラスカ州　デナリウエストバットレス（6192m）
期間：2011 年 5 月 10 日～6 月 2 日
隊の構成
・信州大学山岳会 THE MEN`S
　隊長：大木信介（OB）
　隊員：小平貴則（会 3）食糧　渉外　土田孝浩（会 3）装備　会計

・カフェコンレチェ隊
　隊長：谷口けい
　隊員：花谷泰広　宮西広太郎

BC の信大 4 人組　左から小平・花谷・大木・土田　後方にはデナリがドンと聳える

行動概略

5 月 10 日

成田空港～シアトル国際空港～アンカレッジ国際空港(5 月 10 日)～ホテル

成田空港で土田と小平が合流し、お互い初の海外のため、手続きなどがさっぱり分からない。出国手続きや荷物の重量を量り終えたころ、別で来ていた花谷さん、宮西さんと合流。4 人で中華料理屋へいきラーメンを食べ、いざアラスカへ！シアトル経由でアラスカ州アンカレッジ国際空港に到着。

早速タクシーを予約してホテルへ行こうとした。しかし、運転手と直接ホテルまで連れて行くよう予約をし、空港内にいた 3 人を連れてきたらそこにはもういなくなっていて、いきなり出鼻をくじかれた！これがアメリカなのかと異国の洗礼を受けながらも、何とかホテルに到着。チェックインに向かうと「予約されていない」。ネットで予約した際、ホテルとは全く関係ないサイトに振込みまでしており、すでに騙されていたようだ。ホテルのオーナーの心遣いで泊まらせていただけたのだが、アメリカ初日早々失態ばかりで辛いスタートとなってしまった。

11 日、12 日

アンカレッジ市内で買出し。シアトル空港のピザが中ったらしく、昨夜から花谷さんの体調が芳しくない。11 日は 1 日中ホテルで休養してもらった。その間 3 人で分かる範囲の買出しをしに大型スーパー Carr`s、日本食を扱っている Sagaya`s、山の店の REI と AMH を回った。白夜で 23 時頃まで明るいので遅くまで歩いた。

翌日は花谷さんが完全復活し、本格的に買出しスタート。WALL MART などで異文化を体感。酒屋ではレジで全員パスポートを見してくれということで、一人ひとり確認。全員 20 歳以上だから楽勝と思いきや、小平が見せた途端顔色を変え店から出て行けと！なんとアラスカでは飲酒が 21 歳からで、20 歳の小平はアウト。意外と厳しいようだ。むしろ日本では考えられない厳重さか。そして買出しも終わり、最終チェックの後パッキング。明日 Talkeetna Taxi の Tim が来てくれることを願いつつ就寝。我ながら自分の手配が不安だ。

13 日：アンカレッジ～タルキートナ

来るかどうか心配であった Tim が来てくれ、タルキートナへ出発。途中で大衆レストランへ入り飯の量の多さに感動。ウエイトレスが水のようにコーヒーを注ぎに来ることに驚き、アメリカの食文化を堪能。タルキートナに向かうにつれ近づくデナリに興奮しながら、山の大きさを徐々に実感。TAT に着いてからはセスナに乗せる荷物に重量制限がかかるため、重さを測り調整。1 人 125dl までであったためうまく調節を施す。その後、レンジャーハウスでブリーフィングを受けいよいよデナリへ行くんだという気持ちに。夕飯は地元のレストランでお洒落に済まし、バンクハウスで最後の風呂に入り就寝。いよいよ明日はセスナで氷河入り！楽しみで胸が躍る。

14 日：タルキートナ～カヒルトナ氷河 BC

バンクハウスで朝を迎え、軽く朝食を済ませてセスナ飛行場へ向かう。ドイツから来た２人組パーティとともに、彼女が日本人というイケ面パイロットの操縦するセスナに乗り込む。力強いプロペラ音と

同時に機体が動き出し、気がついた時には地面から離れていた。デナリに近づくにつれタイガは氷河へ変わり、氷河上に連なる山々のすぐ脇を通りながら圧倒的存在感のデナリが徐々に近づいてきた。そしてカヒルトナ氷河へ着陸。すでにBC入りしていた、ボンドさんとけいさんに迎えられた。これからついに登山が始まると思っていた矢先、自分たちのミスで食糧が足りていないことが発覚。2隊分買うべき食糧を、2隊まとめて1隊分と勘違いし、買出しが全く足りていなかった。頭をよぎった疑問点をうやむやにして聞かなかった、コミュニケーション不足だ。ボンドさんが切れる。気を取り直し昼飯でホットケーキを焼く。けいさんの采配ででカフェコンレチェ隊の後半の食糧を使い、何とか6人分の食糧を用意してもらった。夕飯は親子丼を頂き、何とか出発できそうで安心し、就寝。

登山実動日程

１５日：8:00起床～9:20朝食～13:10 C1出発～19:00 C3着～24:00就寝

いよいよ始まる実動初日。Team The Men’sの始動である。初の氷河歩行、初のソリ引きととにかく未知の体験。ソリの扱いに慣れるまで大変だったが、しばらく歩き登りになってくると要領を得ていた。周囲はガスっており遠くまで見渡せなかったが、デカイ氷河とデカイ山、そして初めて見るセラックに感動し、いつの間にかC1に到着。初日はほぼ平坦な道のりであったが、ソリとロープを結びながらの行動に慣れていった。

C1よりデナリ

16日：8:00起床～11:30出発～18:40 C3到着～20:00後発隊到着～1:00就寝

本日は朝から大発見があった。朝食のマカポテ、今まではケチャップ、マヨネーズ、バジリコで食べていたが、今回そこにマスタードを加えて食べたのだが、これがメチャクチャうまい！さらにガーリックパウダーを加え、文句なしのマカポテが出来上がった。

この日の行程は長く、標高も 3350mを越えてくるのでペース配分が難しい。ソリを引くロープを巻いた腰が後半痛く、そんな身体的ストレスに耐えながらも C3 に到着。それから頑丈で快適なテン場を作るための熱い整地が始まった。標高が 3200mとはいえ緯度は高く、酸素は薄い。普通以上に息切れをするが、構わずスノーソーで雪を切りデカイブロックを運んで壁を作っていく。終わりの見えてこない作業であったが、夢中で取り組んでいた。しばらくして後発隊が到着した。夕食は最高にうまいカレーを食べ、寝たときには次の日になっていた。白夜最高！

17 日：9:20 起床～13:30 出発～14:12 順応で 3600m付近まで～C3 へ帰宅～19:10 夕食～22:00 就寝

高山病は二日酔いのような症状が出るというのをこの日の朝体験し、高所を実感。この日は順応で 3600m付近まで上がった。ガスっていて風も強かったが、3600mという初体験の標高を経験し興奮！高所経験者がいなかったらこの日も次まで進もうとして失敗しているのかもしれないなあと考えながら、C3 まで下っていた。動いていても、テント内にいてもとにかく深呼吸を意識する！

18 日：8:30 起床～11:40 出発～14:30 ウィンディコーナー～17:30 MC（メディカルキャンプ）着～MC 出発～20:00 C3 着～23:30 就寝

本日は荷揚げと順応を兼ね、MC までを往復する。4000m近い標高にもなると今までのようなペースでは息切れがひどいので歩けない。天候は一日中晴れていて、風が強いといわれるウィンディコーナーは無風で最高の条件であった。MC での整地作業は、さすがに今までのように激しく動くことはできず 4000mという高度を実感した！これからから頑張れるよう、夕飯ではけいさん特製のスタ丼を食べ明日に臨む。

荷揚げを終え、MC から C3 への下降　「デナリの妻」こと Mt.フォーレイカーが大きい

19 日：大雪のため、沈殿

昨日 MC まで行っていたため、これから先が分かっているので沈殿をしていても不安は無かった。どんどん人が上がってきていて、C3 は大規模なテント村になってきている。何度か雪かきをし、テント内ではとにかくくつろいでいた。

20 日：昨日から続く大雪で、沈殿

夜中に雪かきをし、昼間にも何度も雪かきに追われた。二日連続での沈殿となると早く体を動かしたくうずうずしてくる。この日食べたチヂミがうまくて、帰ってから作ってみようと思う。天気予報では明日から徐々に天気が良くなるようだ。

21 日：8:00 起床～12:00 出発～14:50 ウィンディコーナー～16:45 MC 着～19:45 整地完了～23:00 就寝

いよいよ MC まで上がる日。天気は晴れ！2 日の沈殿は良い順応にもなっていたようで以前より快調な歩き出し。今回のウィンディコーナーは風が強く、小鳥が体半分氷に埋まって凍死している。それほどの風が昨夜まで吹いていたようだ。MC に着いてからデポを掘り上げ、4220mでの整地が始まった。C3 の整地のように体は動かなかったが、思っていたより体は動き快適なテン場が出来上がる。夕飯はスープパスタで、このような場所でおいしいパスタが食べられるのも、圧力鍋とけいさんのおかげだなぁと感動した。

22 日：9:20 起床～12:30 出発～16:20 ヘッドウォール上のコル～18:00 MC 帰宅～23:00 就寝

今日は順応で蒼氷のそり立つヘッドウォール上まで行く。ロープは結ばず、ゆっくりとしたペースで行くよう注意を受けながら登っていく。ヘッドウォールの FIX では初めて扱うユマールを駆使しながら、周りのペースに流されず確実に歩を進めていく。稜線に着き荷物を雪の中へデポ。晴れてはいたが風は強い。MC に戻ってから急に天候が悪化し雪が降り出した。

ヘッドウォールの渋滞

23 日：8:00 起床～11:25 出発～13:40 FIX の取り付き～18:20 HC 着～23:00 就寝

ついに最後のハイキャンプ(HC)まで上がる日、無風快晴という最高の天気に恵まれた。ものすごい数の人が上へ上がろうとしており、ヘッドウォール付近は大行列となっていた。ヘッドウォールを越えてからデポを回収し、気の抜けない岩稜が続き何箇所か FIX も設置されている。しかし最高の天気！遠くの遠くまで見渡せ、氷河のデカさ、この場所の高さとすごさ、ただただ感動していた。この高度での整地はさすがに大変で、数秒全力で雪をかいて即交代といった感じ行う。動いた後は息切れとめまいと頭痛に襲われ、とにかく必死であった。テント内でも呼吸を常に意識し、気を抜いた瞬間頭痛が起こり 5000 m という高度を肌で実感した。ボンドさんは高山病で唸っている。高山病は平等のようだ。

ウェストバットレスの登行　後方に Mt.フォーレイカーとカヒルトナ氷河

24 日：7:20 起床～11:00 出発～13:45 デナリパス～15:50 HC 着～23:00 就寝

山頂を狙う予定で出発。今年既に事故が起きているデナリパスまでは長いトラバースで、気は抜けない。高度も高いのでペース配分に気を付ける。早く歩こうにも直ぐに息切れしてしまうので、呼吸とゆっくり歩くことを意識していく。トラバースの最中に土田が吐く。デナリパスで体調や、風が強いことを考え引き返すことにし、HC へ。今までとは別次元な高度を体感した日であった。

25 日：山頂の風が強く、アタックは無理と判断し沈殿。

朝食の最中、土田が高度に慣れずアタックは止めると言った。宮西さんも山における作業など 1 人でできないので止める。花谷さんが二人を MC まで連れて帰り、残りの 3 人はチャンスを見計らってアタックを狙うこととした。10：30 に外へ出たところ、山頂は風が強いのでしばらく沈殿、午後から狙うことに。11：00 頃花谷さんたちは MC へ向かい出発。結局一日中風が強く、出発ができなかった。明日の方が風は弱いという情報があったのでそのチャンスに賭け、本日のアタックは断念した。

デナリパスへの登行

26 日：6:00 起床～14:30 出発～17:00 MC 着～24:00 就寝

夜の 23:00 ごろ HC がざわついており、何かが起きたようだ。5:00 にはヘリコプターの音まで聞こえ、けいさんが外へ出ていく。起床してから、昨夜デナリパスで 4 人パーティが滑落し 2 人亡くなったということを聞いた。デナリ山頂は笠雲が掛かっており昨日より状況は良くない様子で、しばらく待機することに。13 時に花谷さんが心配して様子を見に MC から上がってきた。そこで日本人 2 人がフランシスで亡くなったと聞く。C2 付近ですれ違った栗原さんと白石さんだった。朝からショックな情報が続き、戦意が喪失していく。そんな中、訓練で来ていたオランダ軍は「山が自分たちを呼んでいない」と言って下山していった。自分たちも今回は諦めようと判断し MC まで下った。

MC に着いてから、ボンドさんからやはり明日アタックしようということを話され、その時は土田と小平は行きたいと即答。夕飯の時花谷さんから、もう 1 度明日行くかどうか各自本音で話し合い考え直そうという話があり、長時間にわたり話し合いをした。それぞれの意見が出て、アタックは花谷さん、けいさん、ボンドさん、小平の 4 人で明日 MC から山頂を狙うこととなった。

27 日：6:22 起床～8:10 出発～11:08 HC 着～13:18 デナリパス～17:50 デナリ山頂～22:30 HC 着～23:10 MC 到着～3:00 就寝

ついに来た山頂アタックの日。最後の最後のチャンスだ。今まではっきりしなかった天気もこの日は無風快晴という最高の状態。自然と朝から気合が入るがペースと呼吸への意識は切らない。デナリパス手前から渋滞がすごく、逆にゆっくり行けた気がする。デナリパス以降はまだ知らない場所で、そこから急に体が辛くなった。これ以上のスピードは出せないペースがあり、それを越えた瞬間立ち止り呼吸を整えねばならなくなった。フットボールフィールドに着いてからいよいよ山頂がそこにあるんだとい

う気持ちで心が高鳴るが、これまで以上に高所の辛さが体に現れていた。一緒の三人はさすがで、余裕があり、いつも笑っていて励ましてくれる。山頂への最後のナイフリッジでは、思うように動かない体で越えられるのかと緊張。山頂直下、先行の花谷さんが待っている。けいさん、ボンドさんを待ち、4 人で肩を組んで山頂まで歩いた。山頂に着いた時には何も言えず、ただただ感動していた。最高の天気と、素晴らしい景色に言葉も出なかった。「春寂寥」を肩を組んで歌っている時は、呼吸も苦しく歌詞も出てこなかったけど楽しかった。長かった。

山頂を後にし、再び気を入れ直し下山。やはり事故の多いデナリパスをこれからまた通らなければならないのかと、下山中は不安であった。MC まで気を抜く暇は一瞬も無く、最大限に集中し、15 時間の行動を終えた。MC では土田と宮西さんが迎えてくれ、土田の出してくれた甘い飲み物が体にしみわたり、忘れることのない味となった。更に夕食の準備までしてくれていて、感謝感激！様々な余韻とともに長い 1 日は幕を閉じた。

デナリ山頂　左から大木・谷口・小平・花谷　最高だ！

28 日：10:00 起床～15:40 出発～16:40 ウィンディコーナー～18:20 C3 到着

朝起きてみるとすでに皆動き出していて、外へ出ると雪で「ＳＡＣ」の彫刻(土田作)が！すげぇと思いつつ、ボンドさんに写真を撮って頂く。みんな何となく疲れている様子だったけど、落ち着いていて今までよりゆっくりとした雰囲気が漂っていた。C3 までの下山は靴ずれとの戦いとなり、それ以外記憶にない。来たときとは比べ物にならないほどのテント村に驚き！ついに明日下山かと考えながら就寝。

29 日：8:10 起床～12:40 出発～15:15 C1～18:00 BC 到着～19:00 セスナ発～19:45 タルキートナ着

準備を終え出発しようとした時、明治大学山岳部が C3 に到着。しばらく話をしたり写真を撮り、出発！久々のソリで今回は下りなので、ソリのコントロールがとにかく厄介。良い方法は無いものかと考えながら歩いていると、土田がコツを発見しいくぶん楽になり、最後の氷河を目に焼きつけながら BC へ向かう。幸運にもセスナに今日乗れるということで、帰る準備をし荷物の重量検査を済ませる。あっという間に終わってしまったなぁとぼんやりハンターやフォーレイカーを眺めていたが、だんだん寂しくもなってきてセスナを待っている時間だけは長く感じた。そして花谷さん、けいさん、ボンドさんに別れを告げ 3 人はタルキートナへと帰った。

バンクハウスで久々に見た自分の体のやせ具合に驚きながらも、来る時はまだ出ていなかった木の葉が今では新緑となり、あっという間の登山であったが時間の経過は思っていたより長く、遠征が終わったのだと感じた。

・各係の反省

食糧係（小平）

食糧の最大の反省：全体の食糧買い出しを頼まれていたが大幅に足りなかった事である。出国前に信大隊と、カフェコンレチェ隊とは別で食糧買い出し表を作り、現地においても別で買い出しを行えばよいという状態にあった。しかし現地では、2 隊の食糧表を 1 つにまとめて考え買い出しを行った。その事に違和感を感じていたにも関わらず、その事を言わずに買い出しを進めていた。食糧不足であわや山行自体が中止になる所だったが、けいさんや花谷さん、ボンドさんのフォローにより、カフェコンレチェ隊の後半用の食材をうまく配分していく事でどうにか登山を実施する事が出来た。このことは一つの確認を行うだけで回避できた問題を、それを怠ったために起こった致命的なミスである。少しでも疑問を感じた時に遠慮せずコミュニケーションをとる事が円滑な運営に繋がる事を学んだ。

圧力鍋：圧力鍋は素晴らしかった。あのような高所でも米を炊き、パスタをゆで、うどんも美味しくしてしまう。重いけれどそれ以上の価値がこの鍋にはあった。山での食事は、想像を絶する程豪華なもので毎日が楽しみであった。けいさんが作る食事は勉強になる事が多く、山岳会のエッセンに吸収できる技を頂いた。さらに**ジェットボイル**は今までの水づくりの概念を大きく覆し、その水づくりの早さと効率のよさに圧倒される程であった。是非これらの道具は現役でも取り入れ、合宿ではより豊かな食事を実現させていきたい。

渉外（小平）

航空券の購入：航空券の購入の際、花谷さんから大体の出発時間と到着時間を指定されていて、それに合わせるような形で各自航空券の購入を行った。小平と土田は二人で同じものを予約したのだが、到着時間を夜中という見当違いな時間で予約をしてしまった。実際の場面を想像すれば、夜中の到着やバラバラに到着することがいかに計画の運営に支障を及ぼすかは分かったはずだ。振り返ってみると、実際

の場面や先の事に対し想像力が及んでいなかった。そして帰国日を勝手に早めてしまい、結果的に登れたものの、日程が理由で諦めざるを得ない可能性もあった。何事も「確認作業」がいい加減だったための支障だった。

ホテルの予約の不備：ホテルの予約を日本からインターネットで行い、実際うまくいったと思い込んでいた。しかし現地でホテルの受付に行ってみると予約はされておらず、間違ったサイトにただお金を振り込んだだけであった。ホテルの方の親切心で部屋を確保して頂き泊ることはできたのだが、跳ね返されてしまっていたら現場で一から宿泊先を探さねばならない状態に陥ってしまう所だった。信用できるサイトを使い、確実に宿泊先を確保する。そういった基本的な事務手続きを正確にこなしていくことが、計画を円滑に運営する事に繋がる。今後そのような方面にも力を付け、会の円滑な運営に貢献できる頼れる人になる。

アラスカ鉄道について：今回土田、小平はタルキートナからアンカレッジへ戻る際アラスカ鉄道を利用した。ハイシーズン前であった事もあり、少人数でタクシー代を割るよりも安く楽しい帰路に付けると期待した。アラスカ鉄道は一日の運行本数が少ない事と、アンカレッジの鉄道駅が空港から比較的遠くにあるため長い距離を歩く事になった。しかし幸いにして今回僕たちは空港へ歩く道すがら、若い奥さまに呼び止められ「あなたたちどこまで行くの」と尋ねられた。「空港まで行くつもりです」と答えると、奥さまは驚いた様子で、空港まで車で送るから乗って行きなさいよというような事を言った。僕たちは面喰いつつもそのご厚意に甘え、奥さまの娘さんとその友達の女子大生二人に空港まで送ってもらう事が出来た。その車は小平と同じ SUBARU ですよ、などと話しながら幸せなひと時を過ごした。

装備を振り返り（土田）

この遠征において買い足した主な装備を挙げると、ザイル×2、シュラフ×1、オーバーシューズ、衣類、防寒着（ダウン類）と防寒対策の物が多く、買い足し額の 8 割を占めた。幸いにして、高価なダウンジャケットやスノーシュー、シュラフをボンドさんやジャンボさんから借りる事が出来たため費用を大幅に節約する事が出来た。また、㈱モンベル社の援助により基本的な衣類についても充実し大変助かった。振り返ってみると、ここにもまたこの遠征が多くの人の援助により円滑に運んでいる事に気がついた。

C3 上部よりフォーレイカーカヒルトナドーム

会計の報告（土田）

交通費（一人）	
現地移動費（タクシー・電車）	11,500 円
航空券	148,000 円
セスナ＋ガス	52,000 円
国内移動費	約 12,000 円
食費（一人）	
入山中 1050 円/日×16 日	16,800 円
現地滞在中	15,000 円
その他（一人）	
宿泊費	5,000 円
装備費（ザイル 2 本、寝袋など防寒具）	85,000 円
山岳保険費	6,800 円
合計	**352,100 円**

帰国後計算してみると、計画段階から、食糧費を除いて大きな逸脱もなく、中々妥当な消費をしている事がわかった。それと同時に、遠征ではそれぞれ 30～40 万円という大金が動くので有効に資金を運用する為の計画の重要性を実感した。

下山後、BC での集合写真

アラスカ雑感

土田孝浩　（会 3）

‘Caramel Macchiato please.’おそらくこれが海外へ来て、初めて能動的に外人へ話しかけた英語だと思う。シアトルの空港内のスターバ・・・*STARBUCS®*　での事である。

2011 年の 5 月。アラスカ州のデナリの登頂を目指した。初めての海外にして初めての海外遠征。巨大なスーパー、セスナ、見渡す限りの氷河。金髪のオネエチャン達。目に映る物全て新鮮で刺激に満ちていて浮かれまくっていた。しかし、その一方でデナリ入山までの実務においてやることなす事全てが裏目に出てしまい、この上なく最悪の貢献度での入山となってしまった。事の原因はそのほとんどが意思の疎通、連絡の不備という現役間で問題となっている点に帰結するだけに感想を書きながら改めて後悔の念がこみ上げてくる。

また、自分の英語力ではレンジャーステーション、セスナの手続きで門前払いであった。ここに至ってようやくコミュニケーションに対する危機意識を持ち始めた。

紆余曲折あってセスナでカヒルトナ氷河に降り立つ。そこはテント村だった。

これから凡そ二十日間、我々もこのテント村の住人となるのだ。

はじめに任された仕事はズバリ、パンケーキを焼く事。水と粉を調合し、適切な分量をフライパンに垂らし、焦げないよう気を付けながら焼く。この一連の動作をこれから何十回と繰り返し行った。その過程の中でやれナッツを入れてみる、青汁を入れてみると様々な工夫の余地があり、大変楽しめた。

さて、氷河歩きだが、氷河の上では荷物を運ぶためにそりが大変有効な手段となる。セスナの着陸点から北方に聳える Mount Frances を巻くようにして適度に下り適度に登るとキャンプ 1（C１）へ到着する。この間はソリを気にしたり、周りの風景を堪能しているうちに終わる。ここ数カ月滞っていた何かがようやく循環し始めたように感じられた。とてもすがすがしい。

C1 から C3（3400m）まではおよそ 1000m の高低差がある。ここにおいては慣れないソリを引く事が非常に困難となる。腰に食い込むロープを引きながら登る急坂はまさに拷問。C3 に着くと韓国隊がハチミツドリンクを持って出迎えてくれた。心からの親切が身にしみる。一服するや、早速防風壁の作成に取り掛かる。この天場には後に長くお世話になった。

MC（4300m）へ順応も兼ねて荷揚げして降りてきた後、**C3 にて 2 日間吹雪かれる。**

この間に、花谷さんからお借りた『青春を山にかけて』著：植村直己を読む。（初めて）

あらすじは省略して・・・

一気に読み切り、どうして今まで読む事が無かったのかと思うと同時に、今自分がアラスカの氷河の上のテントの中でこの本に初めて触れられている事に幸せを感じた。

今一度気合を入れなおす。

2 日間の沈殿の明けた 21 日。MC（4300m）へベースを上げる。この高さまで来ると、高所の影響が際立ってくる。テント設営において一番キツかったのはスノーソーで雪のブロックを切り出す作業だった。スコップで掘り下げたり、切り出されたブロックを積む作業は呼吸を意識することで無理なく行えたが、スノーソーは耐え難かった。あれは脳に来る。

22 日は順応を兼ね、荷揚げ。翌 23 日に HC（5200m）を目指す。この日は前日の順応のおかげかどうも体が軽く、HC まで調子が良かった。相応に疲労したが、頭の中は妙にすっきりしていた。もしかしたら、これが前兆現象だったのかもしれない。テント設営のときに HC 以下でも辛かったが、スノーソーで雪を切り出している際に、辛さとは別のヤバさを感じた。
テントの設営が一段落しても頭がぼーっとした感じが抜けず、いよいよもって高所の影響を体感した。脈拍などにも顕著な影響が出ていた。現役として張り切りたい所であったが無念、活躍できず。
24 日、高所登山の洗礼を受ける。前の晩、食欲は皆無。それなりに食べたが、明け方に腹痛を感じ、下痢を覚悟する。起床して一段とボリュームの上がった頭痛を我慢しながらのエッセン。高度を下げてから思い返すと、喜怒哀楽の感情ははっきりとあるのだが、それが無意識には表現されていなかった。意識的に口角を上げ、目じりの筋肉を緊張させる。この一連の重労働を経てようやく軽いジョークに応答し果せる。行動時は予想を裏切ることなく体力を削っていく。この時点ではまだ気持ちも前向きだったので山頂を目指す。随分時間感覚が鈍っていたので、少し歩いた後、頭痛が吐き気に変わっていった。デナリパス（5500m）まで行き、不調を訴えて、山頂アタックを中止する。覚束ない足取りで HC へ戻り、もう一度吐く。その晩はエッセンに参加する事も出来ずじまいであった。
長い夜が明けて、朝食の最中にどうやら駄目らしいと感じ、全体に打ち明ける。花谷さんに付いて頂いて MC まで高度を下す事になる。下る準備をしながら張り詰めていたものが途切れ、支離滅裂な事も言っていた。100m、200m と高度を落として行くうちに HC のテント設営から一時も止まなかった頭痛はピタリと止み、自分の脳内に久しぶりに静寂が訪れた。植村直己がデナリで聞いたアイゼンが雪に食い込み軋む音は俺の脳に敗退の音として響いた。
高度を下げてすっかり落ち着き、花谷さんに調子はどうかと聞かれ「治っちゃいました」と情けない声で答えた。台風が過ぎ去った後のように心はすっきりとしていた。

MC にて　土田の力作 SAC と被災地へのメッセージがつづられた日の丸

デナリを思い返す

小平貴則（会３）

ちょうど１年前、ボンドさんからこの遠征の話を受け、行きますと即答した。実際準備など本格的に始まったのは今年の１月ごろ。航空券やホテルの予約、計画書作成や装備集め。何もかも上手くいかず花谷さんやボンドさんにご迷惑をおかけしていた。そんな大変だった時期も、今思うと次につながる良い経験となった。

デナリはとにかく大きかった。１つの山を何日もかけて登る。そんなこと日本では経験できるものではなく、毎日が感動の連続であった。やはり忘れることのできないのは山頂アタックの日だ。ここに至るまでの過程があり、この日がある。

３月の東日本大震災の後、ボンドさんの家へ土田と二人で話をしに訪ねた。まずは震災後ではあるが、遠征に行くのかどうか。２人は行こうという気であったが、自分は震災後であったり現役の活動が心配であったりで行かないことを主張していた。それでも２人は一緒に行こうと言ってくれて、そのことがうれしくて、この人たちと行く遠征が楽しそうで行くことを決心した。

アタック前日、花谷さんから出た本音で行くかどうか話し合おうという提案。土田は行かないという判断を下し、自分自身迷った。あの時の３人で登るという思いがあったから、行くことに意味があるんだと…。ただ山頂へは行きたい。今思うとなぜそんなに考えこんだのかとおかしくなってくるが、その時は複雑な心境であったのは確かだ。花谷さんの「行きたければ行けばいい」の言葉に、確かにそうだと考えなおし行くことを決めた。その後聞いたボンドさんからの「目の前にあるものへ挑戦せず逃げたとき、男でなくなってしまうと感じる瞬間がある」という話は忘れられない。

デナリ最高！！

デナリパスから山頂までは今回の遠征で１番つらかった。3 人の方々は自分のペースに合わせてくれて、ペース遅いんじゃないかと必死に歩いていたけどそんなことを気にする様子もなく付いて歩いて下さった。けいさんたちの元気な姿にやる気を受け、山頂を目の前にした瞬間もうそこにあると溢れるものがあったけど、まだだとグッとこらえナイフリッジを行った。山頂寸前、全員で肩を組み歩きだした瞬間、こらえていたものは全てあふれ、もう何が何だか分からない。ただひたすら気持ちがこみ上げどうしようもなかった。山頂は思っていてより広く、そこからの景色を茫然と眺めていた。特に何か考えていたというわけでもなく、ただ山頂を感じていたような気がする。今思うとあの時自分は何も考えてはいない。

下りはとにかく集中していたけど、一方で花谷さん、けいさん、ボンドさんが頼もしく、かっこよく、そんな人になりたいと思っていた。

MCに着いてから自然とボンドさんからだされた固い握手は、克明に心に焼き付いている。

この遠征でこれまで以上に山が好きになり、もっと強くなりたいと感じた。今回得た多くのこと、感じた様々な気持ち。一生大切にし、これからも精一杯１日を過ごしていこうと思う。

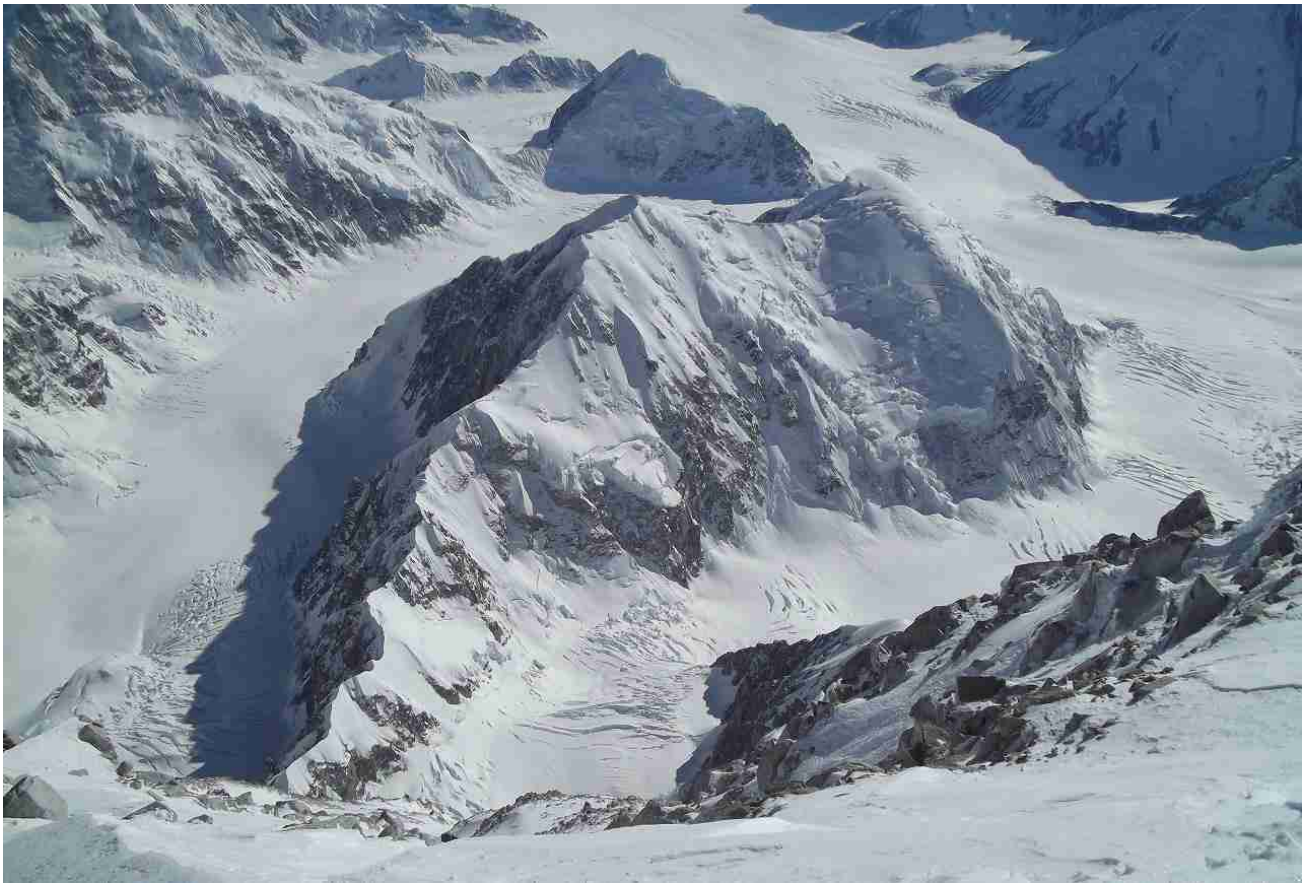
おいしい食事・笑いの食卓

《カヒルトナピークス縦走》

記：花谷泰広

2008 年 5 月。カヒルトナピークスを縦走し、カシンリッジに継続して頂上直下で消息を絶った 2 人の日本人クライマー、山田達郎と井上祐人。その翌年にアラスカに行って帰ってきた谷口けい（以下けいちゃん）に、「もう一度行くなら俺と行かない？」と誘ったのが事の始まりだった。親友である彼らの志をつなぎたい、そういう思いももちろんあった。だけどそれ以上に純粋にあのラインを登ってみたい、そういう気持ちがとても強かった。

信大の現役学生を含めた大所帯でウエストバットレスを登って高所順応を行った。個人的には 12 年ぶりのアラスカで、当時目に入らなかった景色がたくさんあったことに改めて気づかされた。ほぼ順調に順応登山を終え、カヒルトナピークスに備えた。しかしその後天候が悪化。1 週間の天候待ちを強いられたにもかかわらず、相変わらずパッとしない予報が続いていた。もうとっくの昔に準備は整っているのに！これだけ停滞が長いと、身体はなまってくるし、何よりモチベーションを維持することが難しくなってくる。当初はけいちゃんと、大木ボンドと 3 人で向かうはずの計画であったが、ボンドはプレハネムーンの為に先にフライアウト。けいちゃんと 2 人でチャンスを伺う日々が続いた。



カヒルトナピークス全景（デナリ・カヒルトナホーンより）

1日目　6月9日

カヒルトナBC〜C1

思いがけず長期滞在をしてしまったBCのテントを撤収しながら、達郎が考案した「スタ丼」を頬張る。Go Up！の前日や気合を入れなきゃいけないときに、彼はこれをみんなに振舞っていたそうだ。残念ながら、僕は元祖の味を知らない。

しばらくBCを留守にするので、荷物は全て雪の中にデポ。ようやく動き出せる喜び以上に、実は不安でいっぱいの自分がいた。出発前はいつもそうだ。お昼過ぎに出発したが、氷河上には誰もいなかった。それもそのはず。このところの急激な気温上昇で、昼間はクレバスが恐ろしいくらいに口を開けていた。登山者はみな深夜〜早朝の時間帯に動いているようだ。

氷河上を進むにつれて、徐々にカヒルトナピークスの姿が飛び込んできた。後ろに控えるデナリの山頂の遠さを改めて実感する。本当にあそこまで到達できるのだろうか。ウエストバットレスのC1から1時間くらい手前の場所でテントを張る。ここでスノーシューなどをデポしてカヒルトナピークに取り付く予定だ。事前の偵察から、カヒルトナピーク西峰頂上から南西に伸びる尾根をルートとした。まだトレースのない氷河をウロウロするほど雪が固まってないので、しばし仮眠を取ることにした。

2日目　6月10日

停滞〜夜出発

アラームを23時にセットして寝るが、目覚めてみるとホワイトアウトで何も見えないではないか。おまけに雪もちらついてきて、そのあと1時間おきにアラームをセットして目覚めるも好転せず。出足のタイミングを逃した原因は、長い停滞生活のリズムから抜け出しきれていなかったからだと思う。勘が鈍ったのかな・・・。結局昼過ぎになってようやく雲が取れた。貴重な晴れの一日を氷河上で昼寝をして過ごすという、何とももったいない時間の使い方をしてしまった。

この日の夜も同じように23時にアラームをセットしたが、昨日と同じように、太陽が沈む22時ごろから雲が漂い始めた。どうやらこれがパターンのようだ。このパターンを知っているとしたら、それは経験以上の何ものでもない。経験の少ない地域で図ったように動く難しさを感じた。

睡眠もそこそこに荷物をまとめ、昨日のように完全にホワイトアウトになる前に出発。昼間にずっと観察していたので、今度は視界が悪くてもだいたいの見当はついている。クレバスに何度かはまりつつも、無事に取り付きのリッジに達することができた。

3日目　6月11日

C1〜カヒルトナピーク西峰直下

リッジの取り付きから左側面の氷雪壁をコンテで登る。傾斜は上部で70度くらいだろうか。快適なアイスクライミングで稜線に出ることができた。ここからは視界があまりなかったが、時々雲の間から空が見える感じになってきた。どうやら上部は抜けているらしい。高度を上げたかったが、しばらくはプ

ラトー状の地形を進まなければならず、たびたび視界が開けるのを待ちながら進む。夜が明けて気温が上がってくると、雲もだんだん消えてきた。徐々に姿を見せ始めた周りの山々にしばし目を奪われる。ここからのこの景色を、今までいったい何人の人間が眺めただろうか。天気がいいと歩みも軽くなる。「いや～気持ちいいねえ！」と何度言い合ったことか。結果としてはこの日が一番いい天気だった。

プラトーの先は 50 度～70 度くらいのやや MIX した壁となっていて、標高差 300m ほどを登る。ギリギリまで切り詰めたギアを余すことなく使って登ることができた。気温が上がって暑かったせいもあって、この間でややペースダウンとなってしまった。壁を抜け、雪と氷のリッジを 50m くらい進むとまたプラトー。視界が悪くなっていたし、夜通しの行動で猛烈に眠くなっていた。気がつくとけいちゃんが寝ている。仕方がないから 3 分ほどそっとしておいてやって起こす。「30 分くらい寝てませんでした？」と言って起き上がった。次のピッチはけいちゃん先行で進むが、今度は僕のほうが眠くなる。このプラトー付近で幕営するかどうかも迷ったが、結局先に進むことにした。今日のうちに西峰には達しておきたい。視界不良に加え、空腹も手伝ってなかなかペースは上がらないが、プラトーから氷雪壁を 1 時間ほど伸ばしたところで幕営することにした。さすがに何も見えないし、時間的にも限界。視界はなかったが、西峰山頂の直下だった。まっ平らに整地した上にテントを設営。今日はしっかり眠れそうだ。ほぼ予定通りに進めたことで、とても明るい気持ちでシュラフに潜り込んだ。

カヒルトナピーク西峰取り付き

4 日目　6 月 12 日

カヒルトナピーク西峰直下～西峰～東峰山頂

さすがに朝は冷え込んだ。昨日に比べて明らかに雲の量が多くなっていて少し不安になる。今日の目標はノッチ。一気にカヒルトナピークスを縦走してしまうつもりだ。昨日の長時間行動で身体が若干重く、夜明け前の寒さで動きがぎこちない。氷雪壁をトラバース～直上して西峰の頂上プラトーに飛び出す。相変わらずデナリに笠雲が漂っていたり、上空に暗い雲が漂っていたり、あまり気持ちのいいものではない。西峰の頂上に着いても、やはり少しも安堵感はなかった。けいちゃんの顔も、おそらく僕の顔も心からの笑顔ではない。しかし、東峰までの稜線は、稜線上を歩ける場所は少ないものの、リッジの右側を

あまり傾斜のないトラバースで抜けられそうだった。西峰頂上から懸垂下降をまじえて下り、おおむねスノーバーで支点をセットしながらコンテで進む。腹が減ってなかなかペースが上がらない。今さらながらベースに残してきた大量の食料が恋しくなる。

4 日目の朝、カヒルトナピーク西峰頂上のけいちゃん

左上のピークがデナリ、右側にカヒルトナピーク東峰も見ることができる

　およそ 3 時間ほどで東峰山頂。ここからが核心だ。しかしまるで行く手を遮るかのように雲が漂い、雪も舞ってきた。朝と比べて天候の傾向としては回復傾向だったが、視界がなければ先に進みたくても進めない。しばらく様子を伺っていたが、結局視界は開けそうになく、仕方なく東峰の山頂でテントを設営。ここで泊まってしまうことは、先のことを考えると選びたくなかった選択肢だった。先に進むためには食料の計算もし直さなければならない。食べる量を減らして頑張るしかない。今日も平らに整地した場所にテントを設営。快適なのは裏腹に、2 人とも会話は少なめだった。

４日目、カヒルトナピーク西峰～東峰中間部付近

5 日目　6 月 13 日

東峰山頂～リッジ途中

出発直前まで真剣に考えた。朝から視界は悪く、先の様子をうかがうことができなかった。周りの山々にもどす黒い雲が立ち込め、天候が悪化傾向であることが予想された。この先はこれまでよりはるかにエキサイティングなリッジが待っているはず。視界や天候が悪い中で突っ込むことはためらわれた。このまま行くべきか、戻るべきか。ここからならば引き返すことはできる。でもここから先は、ノッチまで進まなければ、比較的安心できる場所はないかもしれない。けいちゃんの意見は「どうしても行きたい」。僕の意見は「もちろん行きたいけど、天気が落ち着かないから戻った方がいい」。ビビリだと聞いていたけいちゃんがかなり強気だったので、余計に慎重にならなければという心理も働いた。ここから先はあの 2 人しか踏み込んだことがない世界。是非とも我々もあとを追ってみたい。

天候が下り坂かどうかは、観天望気や天気予報だけでは分からない。これまでも何度か惑わされてきた。発表される天気予報だけを鵜呑みにしていると、アラスカでのクライミングは成り立たない。天気の傾向として悪くなっている気はするけど、昨日までは一時的な崩れだった。ここで戻るのは後ろ髪を

引かれる思いではあるが、戻れるうちに戻った方がいいかもしれない。でも天候が回復する可能性だってある。雲間から時々先の様子を伺うことができた。いきなりいい感じに切り立ったリッジが見える。とっても急でいやらしそうな雪のリッジのトラバースだ。見えたと思ったら隠れる。そして悩む・・・。

最終的に行こうと思った一番の気持ちは、ここまで来たら徹底的にハマってみてもいいかな、という覚悟だった。ただ、天候にしても雪の状態にしても、コンディションは必ずしも良くはないことは明白だった。また徹底的にハマれるほどの食料がないことも不安要素だ。これまで培ってきたことを全て出し切らないと、このリッジは抜けることができないだろう。

最初のトラバースは、気合いを入れるに十分な内容だった。これまでの登山でも悪いトラバースは何度も経験していて鍛えられていたつもりだったが、それよりも悪い。でも許容範囲だ。ただし、ミスは許されない。ザクザクの氷に決まっているスクリューは、滑落の衝撃に耐えられるとは思えなかった。一気にスイッチが入った。

雪がたまっている北斜面は、場所によっては腰くらいまで埋まる量のラッセルとなり、とにかく雪崩が恐ろしかった。もし誘発してもできるだけ巻き込まれないようにするために、できるだけリッジ沿いを進んだ。アンカーのスノーピケットをできるだけ深く硬い雪の層に打ち込む。時々視界が良くなく、行ったり来たりの場所もあった。

雪が深い北面と対照的に、南面に移ると今度は切り立ったリッジのトラバース。グサグサ氷のクライムダウンに垂直で硬い氷のトラバースのオンパレード。そんな場所は長くは続かなかったが、もちろんスピードは上がらない。

ハマってみたいという覚悟とは裏腹に、正直言って予想以上だった。予想を遥かに上回る雪の量と、気持ちの悪いトラバースの連続。結局ノッチまでの半分も進めなかった。この日も平らな場所で眠れたことだけがグッドニュースだったかもしれない。

５日目の朝

カヒルトナピーク東峰山頂から

先に進むかどうするか葛藤する

6 日目　6 月 14 日

リッジ途中～大ギャップ

今日こそノッチまで行きたい。しかし、天気がよかったのは出発後 2 時間くらいで、そのあとは激しい雪になってきた。気温が高く、グローブがあっという間に中まで濡れてしまう。昨日と同じような地形が多く、南面のクライムダウンとトラバースには時間をかけざるを得なかった。雪の中を根気よく進んだが、足下からどんどん雪崩れる始末。もう時間のことはあまり頭にない。進めるだけ進むしかなかった。しかし適当な場所にビバーグポイントを見つけないと、本当に追い詰められてしまう。

雪崩におびえながらもトラバースをしていくと、大きなギャップに突き当たってしまった。リッジ沿いには進めそうになく、かと言って付近にビバーグできそうな場所もない。ギャップとの間のコルは、見える範囲に泊まれそうな場所はなく、北側に見えた小さなリッジ上の岩の上を目指すことにした。あそこなら雪崩は回避できる。ルートを探っている間に、リッジで待機しているけいちゃんが寒さで凍り付いていた。

だいたいの目星をつけて、けいちゃん先行で懸垂とトラバースで岩の上を偵察してもらった。コールがあったのでその場まで行ってみたが、完全オープンでお座りビバーグは確定という感じだった。さすがにちょっと厳しいんじゃない、と思って周りをみていたら、自分たちがいる大岩の下にわずかながら平坦でしかも岩陰になる完璧と言っていいほどのスペースを発見した。この状況でこれ以上安全に過ごせる場所はないだろう。渾身の力をこめて氷を砕き、何とかテントの三分の一ほどだけ空中に浮いたスペースを確保できた。これなら 2 人が何とか横になって眠ることができる。2 人とも疲労が激しく、水分だけとってすぐに眠ってしまった。

6 日目、

雪が降りしきる中進む

この先に大ギャップがある

7 日目　6 月 15 日

ギャップ下で停滞

夜中雪崩の音を聞いていた。ビバーグポイントにも雪が流れ込み、朝一で雪かきをした。2 人のテンションは完全に下がっていた。ここまで突っ込んできたことに、今さらながら僕は少し後悔していた。やはりあの時、東峰で迷ったときに戻るべきだったのでは。しかしそんなことを思っても仕方がない。すでに状況的にも前進という選択肢はなく、どうやってここから脱出するかが話題になっていた。視界は悪く様子は分からないが、今いる場所からはノースイーストフォーク、通称「死の谷」に下降はできそうだ。しかしセラックの真下を横切る場所があって、運任せの下降になることは間違いない。もう一度リッジに登り返して、反対側をイーストフォークに下降することも最初は考えた。こっちのほうが、下降してからの氷河が安心だ。何度もデジカメでリッジの画像を拡大して観察したが、どうやら途中で岩壁を下降しなければならなさそうで、オンサイトでそれを下降するのはあまりにも不確実。下降するなら、多少運任せでもノースイーストフォーク側に下りる方が無事に戻れる可能性が高いと判断した。

この日の天気予報では、この悪天候はしばらく続くとのことで、意気消沈どころか危機感を感じ始めていた。予報がはずれてくれることを祈るしかない。とりあえず食料はぎりぎりまで切り詰めることにした。この日一日の食料は、尾西の α 米（1 食分）を半分にして、それを二人で分けて食べただけ。小さなスプーンで交互に時間をかけて味わった。あとは寝て待つしかない。

もしこの悪天候があと 3 日続いたら、レスキューを呼ぶしかない状況になるかもしれない。最悪の場合はそれでも帰ろう、と話し合った。しかし、それは最後の選択肢。何とか尻拭いだけは自分たちでしなければ。

深夜雪がやみ、晴れ間がのぞいた。気持ちに余裕はなかったけど、美しい景色にしばし目を奪われる。そしてノースイーストフォークからカヒルトナ氷河まで見通すことができた。ああ、カヒルトナ氷河がおいでおいでしているよ！このまま下降したかったが、相変わらず雪崩は続いていた。この晴天が続いてくれと祈るしかなかった。

６泊目と７泊目を過ごしたビバークポイント
テントの三分の一ほどは空中に浮いていたが
ふたりとも足を伸ばして休むことができた

8 日目　6 月 16 日

停滞〜夜に下降開始

朝になっても天気はよかった。もはや天気予報など当てにならないが、いいほうにはずれたことだけは確かなようだ。すぐにでも動きたくなる気持ちを抑えて、一日雪が落ち着くのを待った。夜になったら動き出すつもりだ。「死の谷」を完全に横断する巨大雪崩の雪煙を見て、なぜ「死の谷」と言われているのか分かった気がした。でも今の我々には、その場所を突っ切ることしか残されていない。岩陰の見えない場所で鳴り響くセラックの崩壊音を聞きながら、無事に戻るのは本当に運任せなのかもしれないと思った。

夜から動き出すとすると、また長時間の行動となる。昼のうちに少しは眠っておきたかったが、外の様子が気になってなかなか眠れない。この脱出のタイミングは絶対にはずせない。異様な緊張感だった。

夕方になっても天候はそのまま。すると突然ヘリコプターが飛来してきた。やばい！ついに我々を探しに来た。BC のレンジャーには 5 日分の食料で行ってくると伝えていたので、心配して探しに来てくれたに違いない。ビバークポイントのすぐ近くでホバリングしていたので、ヘリに向かって「ここから下ります！」とサインした。それを確認したかのようにヘリは戻っていったが、後から聞いたらヘリからは見えなかったらしい。それよりも我々のトレースが不可解なところで消えていたので、遭難間違いないということで準備が始まるところだった。

まるで今のうちに下りろと言われているかのようだ。昼間は派手に落ちていた雪も、今はすっかり静まりかえっている。どうやら下りるべきタイミングが来たようだ。残った食料を食べ切る。少しだけ力が戻ってきた気がした。けいちゃんと、絶対に、何としても帰ろうと誓い合った。

目測で、氷河上まで 10 ピッチと読んだ。すっかり落ち着いた氷雪壁を懸垂下降で下る。無風快晴。振り返るとウエストリブやデナリ南壁が美しかった。しばらく下るとけいちゃんが「カシンリッジが崩れてる！」と叫ぶ。何のことやらその場ではさっぱり分からなかったけど、合流して聞いてみると、確かに下部の懸垂氷河が半分近くなくなっている。今朝聞いた大轟音は、きっとその音だったに違いない。もしもノッチで停滞していたなら、どうなっていただろうか。こんな状況だったけど、幸運だったと思わずにはいられない。

7日目深夜、もうすぐ日付が変わる頃。死の谷上部のプラトー部分に降り立ったあたり

9日目　6月17日

ノースイーストフォーク～C1～BC

7ピッチで最初のプラトーに到達。日付が変わった。ここから先がセラックを背負った壁の真下を横切らなくてはならない。シェルパが危険地帯を突破するときに呪文を唱えるように、我々も知っている限りの呪文を唱え続けた。雪が深かったが、先頭のけいちゃんのラッセル力がハンパなかった。

いよいよセラックの真下に差し掛かった。ここから3ピッチの懸垂下降。いつもならミスしないアバラコフ作りだけど、焦っていたせいか一度ミスった。落ち着け！大丈夫だ。3ピッチ目は60mギリギリ、最後は空中懸垂で氷河上に達することができた。無事にここまで下らせてもらったことに純粋に感謝した。今日の我々は守られているのかもしれない。

死の谷に入ってからは信じられないほど順調に進むことができた。ビバークポイントからずっと観察していたのに加え、半月前くらいにここに入ったグループのワンド（目印の竹ポール）が残されていた。そのおかげでほとんど迷うことなく進むことができた。

時間は深夜。太陽は見えないが、真正面に見えるフォーレイカーがずっと太陽に照らされていた。「夕

日と朝日の境目ってあるのかなあ」そんなことを話しながら進んでいると、突然目の前が真っ赤になった。山も今まで以上に真っ赤に燃え上がっている。「あ、朝が来た！」ただ呆然とその美しさに見とれていた。

カヒルトナ氷河で行動する登山者が見える場所まで帰ってきたとき、無事に戻れることを確信した。デナリの山頂に行けなかったことは残念だけど、それ以上にあの状況から脱出できたことに満足していた。

カヒルトナ氷河でレンジャーに声をかけられる。「きみたちはカフェコンレチェ隊か？連絡がないから今朝から捜索を始めようと話し合っていた。すぐにベースに連絡を入れる。よかった無事で！」ヘリで無事を確認してもらったと勘違いしていたので、大変な迷惑をかけるところだった。

氷河上のデポに到着後、まずはテントを設営して食料を貪った。あまりにも空腹だったせいか、あまり胃が受け付けてくれなかったが、何よりも生を実感する瞬間だった。一気に疲れが押し寄せてきて、このまま眠ってしまいそうだったのをぐっとこらえてベースに向かう。

カヒルトナピークとそこからつながるデナリが、これまでよりも大きく見えた。「もっと強くなってもう一度来い」、そう言われている気がしてならなかった。

結果はカヒルトナピークスを何とか縦走して終わった。しかし教訓は山ほどある。2008 年にペルーアンデス・ワンドイ 4 座（全て 6000m 峰）の縦走に挑戦したときに感じたこともプラスして考えると、縦走は縦走特有の難しさがあって、それに合致したタクティクスが必要だということだ。

結果的には荷物、特に食料と燃料は、あまり削らないほうがいい。かと言ってたくさん持って行けるわけではないが、少々ハマっても大丈夫なくらいの食料と燃料はあったほうがいい。したがって、軽量化は真剣に考えなければならないが、最重要視はしない。故に強靭な体力は必須条件。それも多ければ多いほうがいい。トラバースが多いと人数は 2 人のほうが有利。どうしても同時行動が難しいので、人数が増えるほど時間がかかる。ビバークの時も、小さなスペースがあれば十分。黒部横断ほどの荷物は必要ないけれど、やっていることはそれと大きく変わらない部分が多く、この手の登山に強い人間ほどよいと思う。

いつしかジャンボがどこかの雑誌で話していたように「heavy as fast as possible」という発想がピタリとはまる。今回は最終目標を達成できなかったけれど、個人的には次につながる経験をたっぷりできたと思う。もう一度このラインをトライするかどうかは、パートナーが現れるかどうか・・・かな。

使用装備

アルパインドロー×8、ナッツ×1 セット、ハーケン（ナイフ×4

トライカム（スモールサイズ×4、ミディアムサイズ×2、ラージサイズ×1)、

スノーピケット×4 本、120 スリング×3、アッセンダー×1

タイブロック＋専用ビナ、ビレイディバイス＋専用ビナ 2 枚は各自

アイススクリュー　13cm×1、16cm×4、19cm×2

アバラコフ捨て縄　6mm×10m

ロープ（8mm60m）×2 本

食料

朝食：パワーバーハーベスト 1 人 1 本（オートミール状にして食べる）

夕食：マウンテンハウス×3 袋、α 米×1 回（1 食用を 2 袋）

行動食：カーボショッツ、アミノバイタル、ルナバーなどのシリアルバー、チョコレート各種

飲料：スープ朝夕一人一袋ずつ、紅茶＋砂糖

BC からデナリ南壁

山頂から右下に伸びているのがカシンリッジ

手前左のピークがカヒルトナピーク東峰